

校長室通信

令和7年1月14日号
志免町立志免西小学校
高良 祐治

2025年(令和7年)になりました。本年度登校する日数も残り約40日です。今の学年でやり遂げておくべきことを自覚し、次の学年に向けた目標をつくる期間にしてほしいと思います。

昨年度末には、本校でもインフルエンザが流行し、いくつかの学級で学級閉鎖を行いました。現在も寒い日が続く、まだまだ流行期は続きます。子どもたちが元気に登校できる西小であるように、手洗いやうがいなどの励行に努めていきたいと思っています。

便利になりました

学習参観等で来校され、教室に入ったときに、黒板の横に大きな電子黒板が鎮座し、全員の子どもたちの机の上にタブレットPCがある風景をご覧になったとき、「自分が子どもの頃とは変わったなあ。」と感じられるのではないのでしょうか。しかも、高学年にもなれば普通にタイピングもしていますし、資料の編集や提出なども当然のようにこなしています。

授業も、例えば子どもに見せたい写真があるときは、ネットで検索した写真を、教師のPCから子どものタブレットに送り、子どもは手で拡大したりしながらじっくりと見ることができます。家にタブレットを持ち帰って、復習がてら見直すこともできます。

私が教師になった頃は、フィルムを節約しながら慎重に写真を撮り、写真屋さんまで現像とプリントをお願いしに行き、翌日できあがった写真の出来に一喜一憂しながら、コンビニで拡大カラーコピーをして、教室に戻り、色画用紙に貼って、裏に磁石を付けて黒板に貼る準備が必要でした。

このように、これまで子どもに伝えたいことがあってもあきらめなければならなかったことが、簡単に実現可能になってきましたし、子どもたちにとってもより詳しく学ぶことが出来るようになってきており、ICT機器の進化や普及は、学校教育にとっても有効なことだと実感しています。

近道のよさ

情報化社会に生まれ、スマホやPCの小さな画面から世界中の人とつながることもほしい物を注文し届けてもらうことも地球の裏側の今の様子を見ることが出来る環境で育ってきた子どもたちは、それが当然で当たり前の感覚で生活しています。これはこれで便利な生活を実現しているのですからすばらしい

ことです。ただ、当たり前ではなかった時代を知る我々大人との感覚の違いには注意しておく必要があると思います。

社会は「もっと～だったらいいな」「こんなものがあればいいのにな」という願望を、アイデアや技術で少しずつ実現してきました。それまでの面倒なことだったり、不便に感じていたりしていたことを知っている大人は、今感じる便利さの裏側には、たくさんの人たちの努力や工夫、自然環境の恩恵や負荷などがあることを理解できます。しかし、子どもたちがこれを実感することは困難です。

遠回りの時代を知っていて感じる近道のよさと、はじめから最短ルートが用意されている子どもたちとの感覚は違うのだと思います。昨今、子どもや若者がオンラインゲームで多額の課金をしてしまったり、簡単に報酬が得られそうだと“闇バイト”に荷担してしまったりする要因の一つに、このような感覚の違いもあるのではないかと感じています。

学校では、生活科や総合的な学習の時間などを中心に、より体験的な学習を大切にしています。一見面倒な、アナログな学習をあえて経験することで、社会や人や自然との関わりを少しでも実感し、当り前は当たり前ではないことを理解してほしいと思っています。

不便≠不幸

生活科で土を触っている子どもや段ボールで制作活動をしている子ども、総合的な学習の時間に校外に出かけ、様々な人と関わっている子どもや、その準備に取り組んでいる子どもなどの表情はとても生き生きとしています。バーチャルでも疑似体験はできるし、とても回りくどいことをしています。この回りくどいことをあえて味わうことも学校教育の大切な役目だと考えています。